

雑誌『台湾愛国婦人』の史的位 置

—— 新資料・第六十巻を中心に ——

下 岡 友 加

一 『台湾愛国婦人』の性格及び所蔵

愛国婦人会は明治34年、婦人運動家・奥村五百子の提唱により、戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問などを目的として創設された。台湾では明治38年、台北の台湾総督府構内に台湾支部を設置、全島会員四一六八人から活動を開始した。^①その愛国婦人会台湾支部が明治41年10月から大正5年3月に渡って発行した機関誌が、『台湾愛国婦人』である。最も多い年（大正3年）で年間八万六一七五部が台湾島内に配布された。^②発刊から三年後の明治44年には、広告を含めると三百頁近くの分量を備え、当時としてはかなり大部の雑誌となっていた。^③国内の愛国婦人会の機関誌『愛国婦人』（明35・3〜昭17・2）が、大正9年に至るまで新聞形態を取っていたのに比して、『台湾愛国婦人』は第二巻（明42・1）以降、月刊雑誌となり、廃刊までその形態が維持された。日本統治

初期の台湾において、相当な資金と人力をつぎ込んだメディアの一つである。

しかし、当雑誌全88冊のうち、現在までに確認されているものは34冊に止まっている。その内訳は、国立中央図書館台湾分館（台湾・台北県中和市）所蔵の15冊、山武市歴史民俗資料館所蔵の14冊（但し不連続で欠損が多く、いずれも完本ではない）、立教大学図書館所蔵の1冊、個人蔵の4冊のみである。これまでに発見されている冊子のうち32冊については、上田正行「資料『台湾愛国婦人』文芸関係主要記事」〔中心から周縁へ―作品・作家への視覚〕梧桐書院 平20・8）が、文芸欄を中心とした目録を作成している。稿者も、台湾分館所蔵分については、漢文欄を除く全目次を紹介した〔雑誌『台湾愛国婦人』目録―大正四年一月から大正五年三月（廃刊）まで―〕『広島女子大国文』第22号 平19・12）が、極めて限られた所蔵のため、この雑誌の存在は一般的に

は知られていなかったというのが実状である。

愛国婦人会台湾支部の活動に関する最も早い研究成果は、竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史 明治篇』（田畑書店 平7・12）であろう。竹中は、愛国婦人会台湾支部の内実を、「代々職員は主事を台北庁長や総督府課長が兼任しており、主事補も事務員も大半が男性、明治四十二年から大正五年の間に末端の事務員として女性が一〇名働いただけ、あとは通算八〇名の男性が、役所の中に愛婦本部を置いてとりしきっているのである。独立した婦人の団体とは言い難いのではあるまいか」と指摘した^④。表向きは婦人団体の体裁を取りながら、男性官吏によって会の活動方針は決定されており、台湾の愛国婦人会員に特に求められたのは、領台以来総督府の懸案事業である山地討伐（理蕃政策）への支援であった。台湾支部は設立当初から、警察官吏によって行われる山地討伐の犠牲者救護（「蕃人に対し討伐又は防蕃の職務の爲め戦死したる者の遺族及傷病者を救護する」）を、愛国婦人会の定める「戦死者の遺族及廃兵を救護すること」と同等にみなすよう本部に要求し（明治38年12月8日付「稟申書」）、認められているのである^⑤。

こうした植民地統治と切り離せない形で存在する愛国婦人会台湾支部の性格は、機関誌である『台湾愛国婦人』の内容を検討することで一層明らかとなる。雑誌の代表者（台湾支

部主事）は、台湾総督府財務局財務課長の高山仰が兼任で務めており、雑誌刊行期間は、山地討伐事業が本格化した期間（明治43年〜大正3年に実行された、佐久間左馬太総督のもとでの「理蕃五ヶ年計画」）と重なる。誌上では「蕃界彙報」^⑥「討蕃彙報」によって山地討伐の経過や成果が報告され、「討伐隊」の写真は「討伐画報」としてしばしば雑誌の口絵にもなった。また、山地討伐事業を援助するための「慰問金」「慰問袋」の募集も継続的に行われており、それに応じた「慰問金品寄贈」者の名前と金額、慰問活動の様子、救護金の支出先も雑誌に逐一掲載された^⑦。

このように、『台湾愛国婦人』は台湾統治初期総督府の政策履行において、まさしく広告塔の役割を果たしたと考えられ、「帝国」日本の植民地支配の実態の一端を知るに極めて重要な資料であると位置づけられよう。また、それと同時に見逃せないのは、この雑誌が〈内地〉の知識人、著名作家の作品を多く集めて掲載していることである。たとえば、文芸欄には広津柳浪・泉鏡花・伊藤左千夫・土屋文明・与謝野晶子・与謝野鉄幹・長谷川時雨・尾島菊子らの名が定期的に見える。評論では、新渡戸稲造、棚橋絢子、羽仁もと子、三輪田元道、宮田修、岸辺福雄、久留島武彦、青柳有美、跡見花蹊、高島米峰、前田慧雲、沼田笠峰、坪内雄蔵、阿部磯雄、後閑菊野、塚本はま子、鳩山春子、山脇房子、矢嶋楯子、広

岡浅子などの寄稿が確認でき、同時代の〈内地〉婦人雑誌と比較しても、決して見劣りしない執筆陣を擁している。〈外地〉の雑誌に、当代一流とされた〈内地〉作家たちの原稿を常時掲載することは、愛国婦人会台湾支部の会員獲得のための誌面充実につながり、また愛国婦人会及びその後ろ盾である総督府の権威づけを可能にする方策であったと考えられよう。そして、当雑誌に見える〈内地〉作家たちの少なからぬ作品の存在は、「帝国」日本の領地拡大とともに、日本文学の市場がそのまま〈外地〉へと広がった様相を如実に示すのである。

本稿は、右に述べた当雑誌の資料的価値を鑑みて、今回新たに入手した第六十巻の目録を掲げるとともに、雑誌の性格を確認する上で、重要な記事・構成・執筆者について言及するものである。

二 第六十巻目録

まず、ここでは第六十巻の目録を掲げる。当巻は創刊からちょうど五年目を迎えた記念号であるため、日本文及び漢文から成る本文とは別に「創刊第五周年記念帖」と「創刊五周年記念附録」が付されている。本文部分は他巻同様に、評論・小説・和歌・俳句・講談・お伽噺・支部報・読者投稿

欄・懸賞問題などによって構成されている。頁番号は「創刊第五周年記念帖」、「台湾愛国婦人第六十巻」、「創刊五周年記念附録」、「漢文台湾愛国婦人第六十巻」各部ごと別々に設けられており、日本文の「台湾愛国婦人第六十巻」には目次がない。雑誌の口絵には、はじめに大正天皇及びその他皇族の写真が掲げられ、続けて石川欽一郎の水彩画「初秋」、太田秋民のイラスト「行路の紅葉」（なお、明記はないが当巻表紙も太田の筆と見られる）が、いずれもカラーで掲載されている。その他、愛国婦人会台湾支部出張所委員の写真や「本誌寄稿家与謝野晶子女史の家庭」と題した写真、「台湾之諸学校」 「北投温泉画報」といった台湾風物に関わる写真が載せられている。記念号として通常巻より本文の分量が多くなったためか、或いは記念号としての体裁を重んじてか、他巻では数十頁にも及ぶことの多い広告が極端に少なくないのも、この巻の形態上の特徴である。

凡例

- 一 漢字は新字体に改めた。
- 二 目次と本文に相違がある場合、明らかな誤植を除き、本文の表記（掲載順）に従った。
- 三 「五周年」「五週年」と二通りの表記が使用されているが、特に統一せず、本文のまま翻刻した。

第六十卷（大正二年十一月一日発行・20銭）

台湾愛国婦人創刊五周年記念帖 P 1〜48

台湾愛国婦人創刊五周年に際して一言す

顧問 内田嘉吉

記念号発刊につきて

支部長 内田隣子

祝五周年 男爵夫人 後藤和子

実践女学校長 下田歌子

通信局長 角源泉

南投幹事部長 石橋初子

台湾神社宮司 山口透

専売局長 山脇春樹

鉄道部技師 新元鹿之助

元蕃務総長 大津麟平

台北庁長 井村大吉

弁護士 花田元直

宜蘭幹事部長 小松隆子

台北庁参事 洪以南

李景盛 莊延燦

汪式金 黄子清

許梓桑 汪鉄庵

胡南溟 黄爾旋

回顧五年

台湾総督府医学校長

黄嘉図 劉穩順

台湾日日新報社長

高木友枝

澎湖幹事部顧問

赤石定藏

元深坑庁長

横山虎次

南投幹事部顧問

丹野英清

宜蘭幹事部顧問

石橋亨

元台湾日日新報社長

小松吉久

台湾地方法院長

今井周三郎

陸軍部通訳官

藤井烏健

農事試験場長

石川欽一郎

台北出張所委員

芳賀欽五郎

支部副長

三好徳三郎

支部副長

木下ちか子

評議員

石井静子

評議員

安井横子

評議員

高田よね子

評議員

小野錦子

評議員

高橋光子

博文館理事

龜山里子

坪谷水哉

後藤宙外

尾島菊子

小寺健吉

広津和郎

創刊当時追想録

太田広堂

陳百川 王芷香

李冠三 施寄庵

蔡言芳 周紹祖

郭鏡蓉 王大俊

邱及梯 白啓琮

飛行機

女優志願

耳環と鏡―エミル、ロシヤアル―

枯れゆく木―ジヤンニヌ・ヴァド女史―

蚊ばしら

紫釵物語

お伽小説 紫の星

短歌選抄

竹囲詞壇詠草／読者文芸

小品文

婦人倶楽部／懸賞新題

東京近信

寄贈書目／台湾支部報

落語 茶の湯

与謝野晶子

国木田治子

よさのひろし訳

尾島菊子

今関天彭

西岡塘翠

土屋生（土屋文明）

尾島菊子選

福迫佳橋

三遊亭扇朝口述・藁
々斎柏葉速記

台湾愛国婦人 第六十卷

創刊五週年の辞

如何にして良人を選択するか

結婚難と婦人の職業

偉人の半身としての婦人

忙閑録

古歌と女子処世訓

秋草

秋のうた

東北大学の三女史

私の告白

秋に下す種子と球根

文芸

父の故郷

法学博士

文学士

添田壽一

筧舜亮

河野清丸

斗南生

物集梧水

(三七)花圃

榛南生(土屋文明)

一記者

青鞥社旧同人

SY生

SY生

(広津)柳浪

創刊五周年記念附録

脚本国姓爺後日物語梗概 P1~14

漢文台湾愛国婦人 第六十卷 P1~59

慶祝聖誕

祝天長節歌

祝天長節歌

劉家水

邱及梯

徐国清

陳逢源

恭祝天長節

祝天長節

恭祝天長節詞

祝天長節

天長節恭賦

恭祝大正皇帝天長節詞

天長節詞

明治天皇御年譜恭記

寄稿

皇恩救恤台民

天恩優渥歌行

行幸日光詞

討蕃後台灣全島地關 將校偵察之苦心

討蕃歌

討蕃隊暈報占領蕃地

討蕃軍隊奏捷歌

歡迎凱旋隊

新竹隊占領寺耶加路歌行

賀討蕃解隊凱旋

日東形勝錄

吟蕃序

王大俊

李冠三 王芷香

石雪滄 施寄庵

劉穩順 彭煥堂

王俊南

英萱草

許王鄉 揚坤力

許清溪

徐國清

白啓琮

徐國清

王芷香

劉穩順

邱及梯

陳逢源

賴子清

白啓琮

鐘育山

陳百川

石壁居士

大夢鐘

兔鼎德言

沢及枯骨論 感謝可録

好賭者鑑 戒色格言

逍遙鬼

諸羅城隍祭感

有是夫即有是婦

論議

婦道論

勸孝論

求嗣論

人性剛柔論

靈魂不滅論

論揚文會之宜振

忠說

精神的修養

故乃木將軍殉節論說

婚姻論財節

賢婦伝 日本婦範

記五烈女事

有智子内親王

清少納言 紫式部

黃子清

胡南溟

汪式金

汪鉄庵

李冠三

賴子清

張淑子

陳百川

楊基印

黃嘉右

李冠三

洪宜碧

郭鏡蓉

施寄庵

賴子清

饒介延

楊錫賡

安井衡

大槻清崇

源義公

烈女吟

中村先生之母教

時報 東都近音

小説 八重潮

家庭小説 復家婦

文林

龍井觀泉記

亦愛樓記

遊指山樓記

読宦寺各伝書後

春風時雨文

説話 格致叢話

詩壇／会告／撫蕃彙記／火車起訖時間表／輪船出入港日

期／懸賞徵文

近藤瓶城

洪宣碧

鹿島桜巷原作・魏清

徳訳

李冠三

周紹祖

蔡言芳

黃爾旋

洪桜楸

郭鏡蓉

三 第六十巻の内容について

①「創刊五周年記念帖」

当巻最大の特徴は、雑誌のはじめに「創刊第五周年記念帖」が掲げられていることである。この目次には「豫て当支部事業に同情を寄せられつゝある諸名士に乞ひ五年前の回想録を

需めたるに続々御寄稿を辱うしたる」との説明が付されている。日本人執筆者名の多くは肩書きとともに掲げられており、愛国婦人会及び雑誌刊行に協力する人物、人脈を確認することができると注目されるのは、寄稿者の殆どが愛国婦人会役員及び台湾官吏、総督府関係者であるなかで、博文館理事・坪谷水哉の名が見えることである。坪谷（本名坪谷善四郎）は博文社の雑誌主筆・記者として活躍し、のちに『博文館五十年史』（昭12・6）を編纂した人物である。『台湾愛国婦人』は本稿の冒頭でも触れたように、同時代の内地へ雑誌に少しも遜色のない体裁・内容を持つのだが、それが統治初期の台湾でなされ得たのは、明治以来の有力な出版社である博文館の持つ雑誌運営・編集技術に拠るところが大きかったのではないだろうか。そう考えると、巖谷小波や硯友社同人（当巻では広津柳浪）のように、博文館ゆかりの作家の作品が当雑誌に掲載されている所以も理解できる。坪谷水哉自身の『台湾愛国婦人』寄稿は他巻にも確認できるが、彼がこの「創刊五周年記念帖」に名を連ねていることは、当雑誌の刊行・運営への博文館の少なからぬ協力の存在を裏付けるものと言えよう。

さて、「記念帖」に寄せられた文章の内容を見ると、やはり愛国婦人会台湾支部の山地討伐事業後援のはたらきに対する謝辞が目立つ。たとえば愛国婦人会台湾支部顧問（民政長

官)である内田嘉吉は、「理蕃事業の後援については従来諸姉が為し来れる所遺憾なきに近し。或は慰問金品の寄贈、或は出征者に対する送迎、或は傷病者に対する慰安等、諸姉が至誠より出でたる献身的行為は単に出征当事者に於てのみならず、内外人士の俱に認めて多とする所なり」と高く評価した。同様の言は大津麟平、横山虎次、石橋亨の文章にも見える。その他の寄稿文も、雑誌や台湾社会の発展に言及、そうでなければ自身と愛国婦人会との関わりについて述べる内容である。

台湾人の寄稿も行われているが、概して異口同音に雑誌刊行五周年を言祝ぎ、会の発展を祈念する内容である。彼らの文章の殆どに「明治四十一年十月十日」に行われた「本島縦貫鉄道全通式」及び「閑院宮殿下御渡台」を記念して当雑誌が創刊されたという経緯が同様に記述されており、あらかじめ与えられた情報に基づいて執筆がなされているという印象を受ける。彼らの寄稿は、「内台融和」を理念として掲げる総督府及び愛国婦人会の方針に基づいて促されたものであるが、先に掲げた目録に明らかのように、「記念帖」の寄稿者は、巻末の「漢文台湾愛国婦人」寄稿者とその多くが重複している。すなわち、広く台湾人に寄稿を促しているように見えて、特定の人物の協力によって、名目上の「内台融和」が当雑誌には図られているというのが実態であろう。(なお、

「漢文台湾愛国婦人」には断定の難しいものもあるが、その署名から見ても、日本人による執筆が少なからず含まれていると考えられる。)

一方、後藤宙外、尾島菊子、小寺健吉、広津和郎といった〈内地〉の作家(洋画家)たちが提供した文章は、他の寄稿者のように、台湾や愛国婦人会について言及するものではない。あくまで自身の五年前の個人的生活を思い返し、感慨にふける文章である。よって、他の寄稿文との温度差は大きい。寄稿にあたって、会の活動に対する理解は〈内地〉作家たちには要求されず、著名な人物の寄稿、それ自体に意義を見出す当雑誌編集の在り方が生んだ結果と考えられる。

② 日本文「台湾愛国婦人」

ここには、土屋文明(アララギ派)の和歌評釈・短歌選抄、与謝野晶子と与謝野鉄幹(明星派・スバル)の詩、明治初期に女流文壇を切り開いた三宅花圃の隨筆から、国木田治子、尾島菊子のような当代女流作家の小説まで、文芸関係を中心として多くの著名作家の作品が掲載されている。誌面には新旧文学が入り交じり、主張や系列を異にする文芸、作家たちの作品が並ぶ。このような同居は、〈内地〉雑誌では一部の商業雑誌を除いて実現しにくいものである。この一見豪華な混在が、一婦人団体の機関誌に体现されていることは、やは

り『台湾愛国婦人』の大きな特徴であろう。機関誌は、支部報や漢文欄で会の活動を報告するだけでなく、著名人に執筆を依頼し、人々に娯楽と教養と趣味を与え、総合婦人雑誌としての形態をとることで、世間の耳目を集めるメディアであろうとした。そこにこの時期、愛国婦人会台湾支部に課せられていた役割の大きさのほどがうかがえる。

以下、掲載された主要作品について若干の注釈を加えておく。まず、最初にとりあげたいのは、「私の告白」という記事である。署名は「青鞥社旧同人」とあるのみだが、書かれた内容から察するに、『青鞥』創刊発起人の一人、物集和子による文章ではないかと推定される。記事には、与謝野晶子に万葉の講義を受けた頃から、父兄の厳しい訓戒を受け、「少くも私は将来一家の主婦になる身体だつたと気が付いて、青鞥社を去」るまでの経緯が率直に語られている。自身の創作を「素々自己を顧みずして一種の見得から慰み半分によつた事」とその甘さを自省しながらも、「飽まで芸術の為に殉じやうとする、意志の確固な女」に対して「作品の価値を離れた批判は見当違ひではなからうか」との訴えがなされて切実である。『青鞥』と当雑誌との関わりについては既に別稿で触れたことがあるが、吉原登楼や五色の酒が新聞記事となり、世間の無理解と厳しい批判にさらされることになった若い青鞥社同人の一人が、当時如何なる心意、立場に追い込ま

れていたかという実情を知ることのできる貴重な文献の一つと位置づけられる。

その他、三宅花圃「秋草」、広津柳浪「父の故郷」、与謝野晶子「飛行機」、よさのひろし（与謝野鉄幹）「耳環と鏡」「枯れゆく木」が掲載されているが、これらの作品は、いずれも昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』著作年譜から漏れている。

当巻では一つの詩として掲載された「耳環と鏡」は、『リラの花』（東雲堂書店 大3・11、『鉄幹晶子全集13』勉強出版 平16・4 所収）では前後半で二つの詩に分けられ、「耳環」「鏡」「枯れゆく木」の三詩として収められている。初出誌と考えられる当巻掲載分と『リラの花』所収の異同は、以下の通りである。上段が『リラの花』、下段（ ）内が『台湾愛国婦人』の表現である。句読点及び『』表記の変更を中心として、総じてより意味の通りやすい、平明な表現へと改稿されていることが分かる。傍線は私に付した。

「耳環」

エミル・ロシヤアル（↑エミル、ロシヤアル）

「文明」はおまへを傷つける（↑「進歩」はおまへを傷つける）

そんな物は。（↑そんな物は）

「鏡」

女おんなはにつこり、美しい↑彼女おんなは、につこり美しい↑
あらん限りを暴ヒキげ出し、↑ある限りをば暴ヒキげ出し、

「枯れゆく木」

ジャンニイヌ・ヴァド女史↑ジャンニイヌ・ヴァド女史
根ねづよい「生」を望のぞんでた。↑根ねづよい「生」を望のぞんでた。

長い冬、夏なつのない。↑長い冬。夏なつでない。

「言ことひ得えぬ胸」の↑「言ことひ得えぬ胸」の

「わたしは斯ごとかる人」↑「わたしは斯ごとかる人」

愛あいを知ららずに死しぬである。↑恋こひをせせずして死しぬである。

与謝野晶子の詩「飛行機」は、三連から成る七五調の定型詩である。タイトル・署名・第一連の部分は活字ではなく、晶子自筆の原稿がそのまま写真版で掲載されている。当巻は晶子と女兒二人、門生三人の写真を口絵にもしており、晶子が見られ、読まれる対象として高い商品価値を持っていたこと、またそれを積極的に利用しようとする雑誌編集・運営側の意図は明白である。

本稿のはじめにも触れたように、与謝野鉄幹・晶子夫妻はともに『台湾愛国婦人』に数多くの作品を定期的に提供しており、夫妻と雑誌との関係については別に稿を用意する必要がある。いずれにしても、『台湾愛国婦人』は著名作家の未だ知られざる作品を多く掲載しており、資料的な宝庫である

ことは間違いない。しかし、この文学作品を中心とした、機関誌としては不釣り合いとも言うべき誌面の充実ぶりは、統治政策によって生み出された結果であることも忘れるべきではなからう。運営側にとつて、雑誌はより多くの会員と、より多くの慰問金品を集めるための一つの有効な手段だったのであり、ビッグ・ネームは、その呼び物として機能していたはずだからである。

『台湾愛国婦人』は、統治初期の台湾総督府による、婦人団体を利用したメディア戦略の歴史の一端を刻印する資料である。その性格や方法の変化をより精密にはかるためにも、未発見の巻の収集につとめるとともに、個々の記事、作品分析を積み重ねていくことが今後の課題である。

注

(1) 大橋捨三郎編『愛国婦人会台湾支部沿革誌』(台湾日日新報社 昭16・2) 23頁。明治37年2月に台中支部及び台南支部が、同年6月に台北支部がそれぞれ開かれたが、翌38年に三支部を廃して、全島一支部として新たに台湾支部が設立されたという(同書7、13頁)。

(2) 台湾総督府官房統計課『台湾総督府第十三統計書』第二十統計書(明44・2)大6・1)参照。

(3) たとえば、第二十八巻(明44・3)の場合、広告八十二頁、日本文

百七十六頁、漢文三十六頁で構成されている。廢刊前年の大正4年には、広告を含めて各卷常時二百―三百頁であり、その内、漢文欄が約四分の一度度を占めている。

(4) 中村信子は、「奥村五百子が『愛婦』を創立したときから、男性の影が色濃くこの会を覆っている。それは官僚であり軍部である。男たちは、結集された婦人の力と会員が納入する財力が、男たちの取り組んでいる政治や行政、戦争の遂行に不可欠の資源になることを知っていた。女たちの利用価値は高いのである」とも述べている(『植民地台湾の日本女性生活史明治篇』145頁)。

(5) 大橋、前掲書(注1) 24―28頁。

(6) 高山仰は大正5年1月に新竹庁長に栄転したため、第八十七卷(大正5年2月)、第八十八卷(同年3月)の奥付には、雑誌刊行期間とは異なる期間(明41・9―大5・2)雇用されていた、囑託(後事務員)・加納豊の名が「発行兼編集人」として代わりに記載されている。

(7) 大橋、前掲書(注1) 90頁に拠れば、「慰問及送迎費」「見舞及弔慰金」の総額(明治42年―大正4年)は、計八万八七二円四八〇銭に、「寄贈物品」は計十四万九千九百三十四点に及んだ。

(8) 現在確認できるものに、「奥様」(第七十八卷 大4・5)、「蒙古の今昔」(第八十一卷 大4・8)、「礼儀の新傾向」(第八十六卷 大5・1)がある。

(9) 実際、当雑誌刊行期間、台湾支部はその会員数を、雑誌創刊時(明治41年)二万八千五百二人から、廢刊前年(大4年)七万八千五百六人へと大

幅に増やしている(大橋、前掲書(注1) 116頁)。

(10) 推定の根拠は、書き手の「私」が『青鞨』の発刊に直接携わった人物であり、『台湾愛国婦人』第六十卷(大2・11)刊行以前、既に青鞨社を去った未婚の女性であること、退社理由が父兄の厳しい訓戒を受けたことによるという点である。人物の特定にあたり、米田佐代子・池田恵美子編『青鞨』を学ぶ人のために(『世界思想社』平11・12)、らいてう研究会編『青鞨』人物事典―110人の群像―(大修館書店)平13・5)を参考にした。

(11) 拙稿「岡本かの子全集未収録短歌並びに『愛のなやみ』所収短歌の初出について」(『日本近代文学』第77集 平19・11)

(12) 三宅花圃『近代文学研究叢書51』(昭和女子大学 昭55・11)、広津柳浪『同29』(昭43・10)、与謝野晶子『同49』(昭54・6)、与謝野鉄幹『同39』(昭49・3)をそれぞれ参照。

(13) 稿者は先に、台湾山地を小説の「舞台」に設定した、当雑誌連載小説についての分析を行ったことがある(拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の文芸欄―白鷺山人「空中女王」の語るもの―」『現代台湾研究』第33号 平20・3)。

『付記』『台湾愛国婦人』第六十卷入手にあたって、阿部由理香氏(台湾大学法律学院博士課程後期)の協力を得た。ここに記して感謝申し上げます。